

病院だより

インフルエンザの季節です

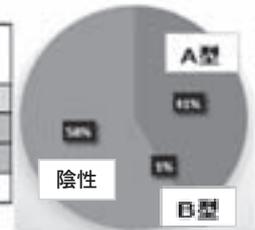
(シーズン別インフルエンザ検査件数)
 町立和寒病院 臨床検査技師 宮部 健治

今年もインフルエンザの流行する時期となりました。予防接種をされた方も多いと思います。ご存知のことと思いますが、昨シーズンまでのワクチンはインフルエンザA型2種類（2株と表現します）とB型1株の合計3種類（3価ワクチンと表現します）のインフルエンザウイルスに対する抗体を作るワクチンでした。今シーズンのワクチンはA型2株、B型2株の4価ワクチンとなり、より効果が期待できると思われます。以下には、過去11年間のシーズン別検査件数と、平成24年からの3シーズンは月別の件数も表にまとめてみました。

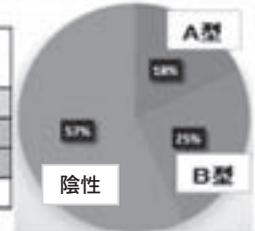
シーズン	平成16年～17年	平成17年～18年	平成18年～19年	平成19年～20年
検査件数	776	249	176	110

シーズン	平成20年～21年	平成21年～22年	平成22年～23年	平成23年～24年
検査件数	329	451	249	176

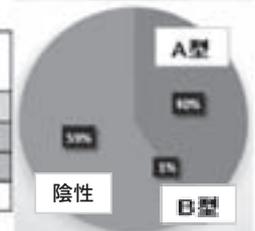
シーズン	平成24年			平成25年					シーズン計	%
	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月		
陰性		1	7	35	95	79	13	5	235	58
A型陽性				39	85	42			166	41
B型陽性							3		3	1
検査件数	0	1	7	74	180	121	16	5	404	100



シーズン	平成25年			平成26年					シーズン計	%
	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月		
陰性	1	1	3	2	39	60			106	57
A型陽性				2	18	15			33	18
B型陽性					1	46			47	25
検査件数	1	1	3	4	56	121	0	0	186	100



シーズン	平成26年			平成27年					シーズン計	%
	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月		
陰性			55	75	21	15			166	59
A型陽性			60	44	8	1			111	40
B型陽性					3				3	1
検査件数	0	0	115	119	30	16	0	0	280	100



これを見ると、検査件数は平成16～17年の776件が最多で、最少の平成19～20年の110件の約7倍になっています。また円グラフで表したように、A型がほとんどを占めるシーズンと、B型もA型と同じくらいの割合のシーズンもあることがわかります。インフルエンザの流行は12月から始まり、翌年の3月には終わることが多いですが、平成21年は9月から流行が始まり、翌年の2月に終わりました。平成18～19年のシーズンは平成18年には流行が始まらず、平成19年2月から始まり、5月に終わっています。このように検査件数、A型・B型の割合、流行の時期にはいろいろなパターンがあることがわかります。

また、陽性と陰性の割合は毎年おおよそ4：6となっていますが、陰性の場合でも、インフルエンザではないと断定することはできません。成人は小児に比べて免疫力が高いため、ウイルスの量がかかなり少ないそうです。さらに、発症からの期間が短くてもウイルスの量が少ないため、陽性率が下がります。特に発症から12時間以内ではほとんど陽性にならない（小児でも50%）ことが研究により明らかになっています。

インフルエンザの検査を受けたことのある方はお分かりのことと思いますが、検査では綿棒を鼻腔の奥まで入れます。なぜ鼻の奥なのかというと、ウイルスの増殖は、鼻粘膜の奥が最も多いからです。検査は多少痛みを伴いますが、最近では綿棒もずいぶん改良され、太くて木の棒だったものが、細くて樹脂製のしなやかなものになりました。

インフルエンザは予防することが一番大切ですが、かかってしまったと思ったら受診して、検査を受けてください。少しでも痛くないように、また確実な結果を出せるような検体を採取するように、常に心がけて検査しています。